耳我の嶺の山道

――万葉集二五番歌の構造と背景――

都倉義孝

一　はじめに

天皇の御製歌

み吉野の　耳我の嶺に　時なくそ　雪は降りける　間なくそ
雨は零りける　その雪の　時なきが如　その雨の　間なきが如
隈もおちず　念ひつつぞ来る　その山道を

天皇御製歌

三吉野之　耳我嶺尓　時無曾　雪者落家留　間無曾　雨者零計
類　其雪乃　時無如　其雨乃　間無如　隈毛不落　念乍叙来
其山道乎　（一25）

或る本の歌

み芳野の　耳我の山に　時じくそ　雪は降るとふ　間なくそ
雨は降るとふ　その雪の　時じきが如　その雨の　間なきが如
隈もおちず　思ひつつぞ来る　その山道を

或本歌

三芳野之　耳我山尓　時自久曾　雪者落等言　無間曾　雨者落
等言　其雪　不時如　其雨　無間如　隈毛不堕　思乍叙来　其
山道乎　（一26）

右の「天皇御製歌」の内包する問題については、すでに多くの考究がなされている。近いところでは、沢瀉久孝「万葉集注釈」・西郷信綱「万葉私記(一)」・中西進「万葉集の比較文学的研究」・松田好夫「問答歌成立の一過程」・「伝誦過程の問題」・戸谷高明「万葉二五番『天皇御製歌』」[注1]などがあり、それぞれ万葉学の成果を踏まえつつ独自の見地からの鋭い考察や圧倒的説得力によって新たな到達点を示している。しかし、それにもかかわらず、諸論の帰結するところは一つではない。それほど右の歌の内包する問題は複雑多岐なのであり、したがって、依然として問題は残されているといえる。

それらの問題点は、ほぼ以下のように整理することができる。(1)「来」は「来し」と訓むべきか。「来る」と訓むべきか。(2)「其山道」は回想の場面か、眼前の景か。すなわち、詠者の視点をどこかに求めるか。(3)「念」の内容は何か。恋慕の情か、天武吉野隠栖時の憂悶か。(4)詠歌の時点如何。すなわち、天武即位前の吉野隠栖行の際か、即位後か。(5)天武ははたして実作者か、仮託

か。(6)類歌三首（一26・一三3260・3293）との関係如何。

(1)・(2)・(3)は、歌の表現にもとづく内容の問題。(4)・(5)は、歌の外側から、歌の内容を規定する条件。初期万葉歌のあり方、享受等にかかわる問題。(6)は、民謡から個人詠へか、その逆かという文学史の局面をどう見るかの問題である。

右のことから導き出される考察の条件は、一に、これらの問題を解くには、作品内部の構造と作品の外側からその存在を規定している状況に対する二つの視点、つまり内なる視点と外なる視点が要求されていること。二に、これらの問題点は相互に密接に関連し合っていること。すなわち、ある問題をどう解くかが必然的に他の問題の解を規制してくること。三に、(1)～(5)を、どう考えるかが(6)の前提になっていることである。

二三異説があるが、従来、この歌は作者とされた天武が即位前、壬申の乱の導火線となった吉野入山の際に、失意による憂悶の情を抱きながら山道を歩いていることを詠じたもの、または、即位後右のことを回想したものと解されてきた。しかし、私見によれば、こうした解は前述の問題点のいずれかの基本的解釈をまげたものである。この歌は、即位後の吉野行幸の際にかつての逃避行の苦しみを回想しつつ同じ山道を歩いていることを詠じたものと思われる。こう解するのが無理なくいずれの問題点とも調和するのではないか。

小論では、(1)～(5)の問題点に順次焦点を合わせながら、天武歌の作品としての内的構造と外的条件を考察することによって、このことを確かめていきたい。ただし、(6)の類歌との関係は、論旨も多岐にわたるので、今は推測の範囲に留める。

二　「来」について

「来」を「来る」と訓むか「来し」と訓むかは、前者をとる代匠記・後者をとる僻案抄以来、数の上ではほぼ互角の形勢で当代の注釈に及んでいる（言うまでもないが、契冲・春満以前の古写本書入などにすでに両者の訓みがあったのであるが）。管見の及ぶ範囲でその両説を掲げると、前者は代匠記・拾穂抄・考・略解・攷証・古義・新考・金子氏評釈・総釈・全釈・評釈万葉・全註釈・私注・大成・沢瀉氏注釈・窪田氏評釈（全集版等）であり、後者は僻案抄・檜嬬手・美夫君志・講義・折口氏口訳・「吉野の鮎」・窪田氏評釈（旧版）・「初期万葉の世界」・古典全書・「万葉私記㈠」・古典大系・万葉集本文篇（塙書房）等である。

代匠記等によって「来る」と訓まれていたのに対して、僻案抄が、「さよみては此御製は山路にての御歌となる也。結句に其山道乎とあれば、山路の間の御製にてはなく、いたり給ひて後の御製とみへたれば、来の字はこしとはよむ也。」と積極的に主張して、これを檜嬬手・美夫君志・講義が代々支持してきて、「吉野の鮎」で一層綿密に論じられてから、「こし」の訓みをとる本が多くなったことは確かである。

しかし、それらの論拠は、全てすでに春満が説いた「其山道乎」の「其」一字にあるのである。すなわち、「其」は或る距離感を持つ語である故に、山道は眼前の景ではなく、したがって「来る」と現在形に訓むと両者矛盾するというのである。

「其」については、或る距離感を持つ語とするのには賛成であるが、それがただちに、「来」の字に助動詞「き」まで訓み添えて、「こし」と訓むことの理由とされるのには疑問がある。

もちろん、集中には、そのように助動詞を訓み添えねばならない例も多い。巻一の例をみると、「晩家流」（一5）を「暮れにける」と訓むように、助動詞を訓み添える場合もある。しかし、この場合は音数を整えるためにもそう訓まれるべきであって、天武歌の「来」と同一には論じられない。他の例を見ても、巻一の助動詞・助詞の表記はほぼ正確と考えざるを得ない。

たとえば「吾許曾居」「吾己曾座」（一1）・「客尓之有者思遣鶴寸乎白土」「念曾所焼」（一5）などの表記と同様に、「来」は前後の語の接続から当然「来る」と訓まれるのであって、活用語尾の表記を省略したものとみるのが最も妥当である。「こし」と訓む場合は、「立見尓来之」（一14）・「形見跡曾来師」（一47）のように、「し」を表記するはずだ。

金子氏評釈が、「然らばシに当るべき字を記すのが至当である。只一字の有無で、過去現在を異にし、全く別様の意趣を成すやうな場合に、それを欠くことはまづ無いと見てよい。」と言い、さらに沢瀉氏注釈が、「殊にこの作では助動詞は勿論助詞も多く表記されてをり（略）、「来」一字はクルと訓むのが自然と思はれる。」と言うのが正しく、「来」は「来る」と訓まれ、その上で理解されていたと考えなければならない。作者とされた天武は、今山道を来つつあると理解すべきである。

三　「其」に関して

万葉時代に、「其」を現在と同じ中称指示に限定使用していたかどうかを決定するのはかなり困難なことであろう。「そ」を中称指示、「こ」を近称指示にそれぞれ使用した場合もあり、その反対もまた存在する。いずれかの立場によれば論証の材料は両者ともにあるわけである。

しかし、たとえば、推古紀歌謡に「そのたひとあはれ」とあるが、万葉巻三の聖徳太子歌では「このたひとあはれ」となっている。これは、属目吟詠性・相聞的契機による普遍性・独詠的一元性を短歌に求めた結果、改作されたもので、「こ」は、太子が行路死者を眼前にして詠じたという現実性を打ち出すために使用されたことは明らかである。その他、記39・40の歌謡（番号は古典大系古代歌謡集による）にも同様の例が見られる。これらの例については、かつて少々論じたので、それに譲りたい。[注2]

このように、われわれと同様の明らかな使い分けの例もあるが、その実体は容易に判明し難いといえよう。ただわれわれの認識では律しきれ得ない、使い分けの意識があったのではないかとは思われる。

それ故に、この天武歌の場合も、「其」の一字によって、眼前の景か、回想の場面かは決定し難い。ただし、この場合、「其山道」が眼前か回想の場面であるかをうんぬんする以前に、それが、歌の前半に「み吉野の耳我の嶺に時なくそ雪は降りける間なくそ雨は零りける」とある、その「耳我の嶺」の山道であるとい

う当然のことをまず確認しておく必要がありはしないか。そうであれば、「其」は、現場指示語としてよりは、「其雪乃」「其雨乃」の「其」と同じ文脈指示語である。その点、従来の諸説は現場指示にいささかこだわりすぎていたのではなかろうか。

詠者の視点を判断すること、眼前の景か、回想の場面かを決するポイントは、やはり、「来る」という現在形の訓みになろう。

ところで、その現在形が歌というものの中においては、そのまま「来た」という意の過去表現たり得ると説く評者も二三見られる。

なるほど、「夕されば ひぐらし来鳥く 生駒山越えてそ吾が来る 妹が目を欲り」「妹に逢はずあらば 為方無み 石根踏む生駒の山を越えてそ吾が来る」（一五3589・3590）などは、左注に「しましく私の家に還りて思を陳ぶ」とあるので、遣新羅使の一員であった作者が一時帰宅しての作であることがわかる。したがって、「越えてそ吾が来る」は、「越えて来た」と過去表現に解することができそうである。

しかし、それは、作品の現実と事実の現実を混同した考え方である。題材は過去の事実であっても（創作の時点から過去の事実でない題材はない）、作者の視点はその過去の中の現在、現時点に据えられているのである。たとえば、人麻呂の「石見国より妻に別れて上り来る時の歌」（二131）に、「夏草の思ひ萎えて偲ふらむ妹が門見む靡けこの山」とあって、現在形の叙述である。が、人麻呂はおのれの体験を一篇の愛情物語に潤色し、宮廷人士の鑑賞に供したものである故、石見から帰京の時点で詠じられたものである。題材は過去のものでも、作者の視点は、妻に別れてさしかかった高角山の山中を現時点としている。その視点から、眼前の山足下の道として詠じているのである。作品の現実は、その現在形によまれた時点にある。現在形即過去表現とはなり得ない。

この天武歌も「来る」とある以上、作品としての現時点は「山道」にある。詠者は「山道」を現在歩み来つつあるのであり、「山道」は足下に踏みしめているもの、すなわち眼前の景となり、その眼前の景を「其」と指示したことになるのである。作品の中において、詠者とされる天武は、今耳我の嶺の山道を歩いているのである。

四　詠歌の時点

初めに掲げた問題点の順序と逆になるが、次に詠歌の時点、すなわち作者とされる天武がこの歌を詠じたのは、吉野隠遁時か、即位後かについて論じたい。前章と同じく、これが解釈の基本条件となるはずである。

諸説を大別すると、前者は「来る」の訓み採り、眼前の景とする評者、後者は「来し」と訓み、過去の思い出とする評者によって説かれる（「来し」と訓みながら即位前の作とする評者も二三ある）。

これは従来ともすれば、問題点①②③の解から導き出された範囲内においてのみ論じられがちであった。そこには、当然堂々めぐりに似た限界があったようである。そこで、今はひとまず前章及び前々章における考察の結果から一応この問題を切り離して、

全く別の角度、すなわち巻一の配列の観点から扱ってみよう。万葉人がこの天武歌をいつ詠じられたものとして理解していたかを客観的に示す手がかりの一つがそこにある。

巻一・二の配列は、雑歌・相聞・挽歌のそれぞれ部立の中で、天皇治世の順になっており、それぞれの天皇代においても、全てなんらかの秩序によっている。ただし、今は同一の題詞の下にまとめられたものを一単位として扱い、その中での順序については問わないことにする。

巻一・二の配列の規準は、ほぼ次のように分類することができよう。(1)年次的配列。天皇治世の順による標題のたて方でも知られるように、これが基本となっている。事件の展開もこれに含まれる。(2)身分の尊卑による。たとえば、「高市岡本宮御宇天皇代(舒明)」のように、天皇・皇后・臣下といったたぐいである。(3)なんらかの対応関係によるもの。たとえば、まじめな歌を先にもってきて、次に軽妙な詠み口の歌を出すといったたぐいである。(4)類纂形式によるもの。たとえば、巻一の難波宮行幸時の歌。

しかし、ことわるまでもなくそれぞれの天皇代が、これらのうちのいずれかの規準によって必ずしも統一されているというわけではない。統一されているところもあるが(おそらくそこは比較的原型を留めて部分であろう)、これらの規準のいくつかを時と場合によって複次的に組み合わせているところもある。

さて、二五番歌の位置せしめられた「明日香清御原宮御宇天皇代」の歌はわずか六首である。初めは、十市皇女の伊勢参宮の際の吹芡刀自の歌で、これは左注の指摘する如く、書紀によれば、天武四年二月である。二・三番目は麻続王の流謫に関する歌で、同じく書紀によれば、天武四年四月。次は、この「天皇御製歌」と或本歌で、年次不詳。終わりが「天皇幸于吉野宮時御製歌」の題詞をもつ歌で、これも左注・書紀によれば、天武八年五月であることは確かである。ついでながら、天武の即位後の吉野行幸は、書紀によれば、この一度だけである。

右の如く、二五番歌は、年次の明らかで、その順に従って配列されている歌々の中に位置づけられている。この歌は、天武即位後の歌で、しかも天武四年四月以降八年五月までのものと認められていたのはまず間違いないであろう。天武朝前後の天智・持統朝の配列に照らしても、この基本線は動くまい。

編纂者は、これらの歌の個々についての詠歌の年月日を記憶していたかは定かではないにしろ、ほぼ歴史の趨勢を心得た上で配列したものと思われる。さすれば、二五番歌も広く即位後天武四年から八年にかけてのものと認められていい条件を、歌そのものが内包していたと考えてよい。

この第二の基本条件と既述の詠者の作品中の現視点は「山道」にあるとする第一の基本条件を考え合わせると、即位後のある日、天武は吉野山中を歩みつつこの歌を詠じたということになる。即位後吉野山中を歩むという設定であれば、八年五月のただ一度の吉野行幸時以外は考えられない。即位後の吉野行幸が一度だけであるはずはないという説もあるが、恣意的憶測にすぎよう。巻一・二編纂(あるいは追補)時の宮廷人士の知識として、可能な範囲で理解すべきである。

ところで、この題詞に簡単に「天皇御製歌」とだけあり、次の二七番歌には詳しく「天皇幸于吉野宮時御製歌」とあるのをみると、この歌の作歌事情が不明故に類似にひかれて、前に載せたと思われるのももっともである。しかし、類似によってだけであれば、不明歌は当然、後に置かれて然るべきであろう。前に置かれたのは、後の歌が吉野の宮でのものであり、これが吉野の宮へ「来」つつある時のものと解されたためであろう。同様に、大友皇子時代の歌だが、その標題が立てられないので、天武代に置いたという説も納得できない。そうであれば、二二番歌の前に置かれねばならない。

また、集中の題詞に疑わしいものも数々あるのは事実だが、題詞の範囲で充分認識されていたということも考慮したい。

題詞の三要件は、(1)作者名、(2)作歌の時期、(3)作歌事情であって、[注3] この(2)・(3)を欠く「天皇御製歌」「何々王歌」なる簡単な題詞の歌をみても、(2)・(3)が不明であったというよりは、題詞で詳細な説明を加える必要がなかったほど(2)・(3)は歌の中にすでに含まれていたという見方も成り立つであろう。編纂者にも当時の享受者達にも、じゅうぶんそれを理解させるだけのものが歌に内蔵されていたと考えてもよいのではないか。そして、それは必ずしも歌の中に全てがあったのではないかもしれない。彼等が持つ歌以外の伝承的知識に結びつくものが歌の中に少しでも認められれば、直ちにそれと一体化され、一つのより完全な作歌事情をかれらの脳裏に作り上げてしまうのである。そうした部分が右の簡単な題詞を伴う歌々の中にあると考えられる。

いわれるように、それらの歌は原巻一への追補であろう。[注4] そのことは、たとえ作歌事情等が不確であったとしても、右のようなプロセスによる年次的配慮で追補歌の一つと見られるこの天武歌が位置づけられたことを、さらには即位後吉野山中を歩むという内容を保証する。

なお、即位後に飛鳥の宮で壬申の乱時の吉野行の時の歌を思い出して詠じたという説も、矛盾解決の折衷案として出されている。既述の考察によっても、この説の成り立ち得ないことは明白であるが、初期万葉の全ての歌の題詞等に示されている詠歌の時点即歌の現在であることがさらにその憶説であることを確定させよう。

五　「念」に関連して

作者とされる天武は、即位後吉野山中を、何を「念ひ」ながら来つつあるのか（この「念」の字は、「思」と記された諸本もあるが、元暦校本・類聚古集・古葉略類聚鈔等写本中でももっとも古いものに「念」とあるので、今はそれに従う）。

集中の「念」と「思」を比較してみると、たとえば「不想念人（あひおもはねひと）乎思者（をおもはば）」（四608）のように、特に明瞭な使い分けの意識は見られない。しかし、「念」は往時の回想を意味する場合に用いられることしばしばである。巻一に限って例をあげると、7「秋の野のみ草刈り葺き宿りし宇治の京の仮廬し念ほゆ」・45「……草枕旅宿りせす古念ひて」・46「阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眼も寝らめやも古念ふに」などがある。その他巻二にも、112「古に恋ふ

らむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが念へる如」などとある。

右の諸例によれば、二五番歌の「念」は往時の回想の可能性があるといえよう。その意味ではない用例もあるので、あえて可能性というに留めるが、後の考察の結果と照合し検討したい。ただし、或本歌に「思」とあるのは、また別の観点から言及する。

「念」の字には、今一つの性格がある。それは、「ぬばたまのその夜の月夜今日までにわれは忘れず間なくし念へば」（四702）に象徴される如く、深く低徊した思い、ひとたびとらわれたら容易に払拭し難いめんめんたる思いである。沢瀉氏注釈の「『念』は常に思ひ、深く思ひ、釈名(四)に所謂『心黏着不レ能レ忘也』である。『念』の一字大切である。」と指摘されるところを尊重すべく、即位後、天武は吉野山中を歩みつつ、「時なきが如　間なきが如　隈もおちず」にめんめんたる深い思いにとらわれているのである。

この歌の冒頭の、「み吉野の　耳我の嶺に　時なくそ雪は降りける　間なくそ　雨は零りける」は、類歌と比較するまでもなく、歌謡としての構成上次の「その雪の　時なきが如　その雨の　間なきが如」を転換部として「隈も落ちず」を引き出すための景物であるにすぎない。しかし、結句に「其山道」とあって、「其」が「み吉野の耳我の嶺」を指示しているのであれば、そして「時なくそ　雪は降りける　間なくそ　雨は零りける」は耳我の嶺の客体化された事実である以上（「けり」は過去・現在にかかわらず客体化概念化された事実についての認識を表わす助動詞と考える。[注5]）それは同時に、天武が歩みつつある「山道」の具体性をもマスクする表現とならざるを得ない。そこに、民謡を個人詠たらしめた跳躍台がある。天武にとって「山道」は「時なく雪が降り間なく雨が零る」と認識された場所として、この歌は構成されているのである。

天武・吉野・雨雪・山道という符号は、宮廷人士の脳裏に刻まれた伝承の天武像を考慮すれば、壬申の乱の導火線となった天智崩御の際の吉野隠遁行に適合し、その状況を想起させずにおかなかったものと思われる。書紀によれば、それは天智十年冬十月十九日のことである。従来指摘されているように、「雪は降りける」「雨は零りける」に照応する。さすれば、この句は、かつての失意の吉野入山時の詠者の体験の認識を表現したものと解し得るのである。

前述の二つの基本的条件では、即位後の天武が吉野山中を深いもの思いにとらわれつつ歩んでいることになったが、その吉野の「山道」はかつての失意の時、間断ない雪や雨に降られつつたどった所なのである。

山道をたどること自体難儀であることは容易に想像されるが、歌の表現としても、「……雪消する　山道すらを　なづみぞわが来る」（三382）・「あをによし奈良の大路は行きよけどこの山道は行きあしかりけり」（一五3728）などでも知られるように、「山道」は難儀なものとされている。

その山中難行には、それ自体の苦しみの他に、山中難行に至らしめた背後の事情・原因にまつわる悲愁が常に色濃く影を落しているようだ。前掲の3728は中臣宅守の歌であって、そこには別離と

流謫の痛苦がこめられているし、人麻呂の「衾路を引出の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし」(二212)にも、死別の悲哀を強めるものとして用いられている。このように「山道」を行くことは、痛苦や悲哀の情の表出と一体となっている。

また、この歌では、「雪」と「雨」が右の山中難行の苦悩を強調している。「苦しくも降り来る雨か神が崎狭野の渡りに家もあらなくに」(二265)・「朝裳よし紀べ行く君が信土山越ゆらむ今日ぞ雨な降りそね」・「隠口の　泊瀬の国に　さ結婚に　わが来ればたな曇り　雪は降り来　さ曇り　雨は降り来」(一三3310)などのように、雪や雨の降る中の行路は辛苦に結びついている。

雨雪を冒しての山行は、難儀そのものであると同時に、そうした難儀に至らしめた事件を暗示し、それに惹起される痛苦・悲哀をそれだけでじゅうぶんに想像させている。天武がそのように難儀し、悲哀を味わった時は、やはりかつての日憂悶の情を抱いて吉野へ入った時以外にはあり得ない。この歌の朗唱を聴いた人々は、雨雪降りしきる山中の道をたどることから直ちに、皇太子の地位を捨てわずかの従者を伴ってわびしく吉野へこもる当時の大海人皇子の辛苦を想像し得たはずである。

この歌の序部には、かつての日の吉野山中の難儀と憂悶がこめられている。それが、「その雪の　時なきが如　その雨の　間なきが如」の転換部によって、主部へ結びつけられ、過去が現在に投影するように有機的に構成されて、完全な個人詠の形に仕上げられている。類歌三首では、「雪は降るとふ　雨はふるとふ」のように、非経験・伝聞・一般的知識として、単なる序にすぎなかったものが、助動詞「けり」の一語によって、美夫君志・吉野の鮎・万葉私記(一)の指摘するように、自己体験化されたのである。それによって、今歩みつつある「山道」の上に、間断なく降る雪をついて行った過去の山道が重層し、「念」の内容が規定されてくるのである。ここで前述の「念」の字の表現する回想という点が呼応してくる。

すなわち天武は、即位後の今、峻嶮なる吉野山中の道をたどりつつ、かつて同じ「山道」を降り続く雨雪を冒し難儀しつつ行った日の辛苦憂悶を回想しているのである。「道の限」ごとにその思い出があるのである。歌の表現するところが正しく以上のごとくであれば、その辛苦憂悶を恋のそれとする古義・新考・総釈等の説が誤りであることは一目瞭然であろう。

この歌に、皇太子時代の吉野入山の際の辛苦憂悶を読むことは、拾穂抄・僻案抄・檜嬬手以来広く認められているところである。が、それは全て「念」の内容としてであって、「念」即回想の対象としてではない。しかし、前述のいくつもの条件を満たすのは、その辛苦憂悶の回想とする解以外にはあり得ないのである。

六　仮　託

二五番歌が、右の如き理解によって、現に見られるように位置づけられており、二七番歌とほぼ同じ事情の下に享受されていたらしいにもかかわらず異った題詞を持つことは、沢瀉・中西両氏の言われるように異った資料から出た故であろう。

資料の違いは筆録者の違いである。一連の伝承に結びつきながら筆録者を異にするということは、両歌が本来別々に伝承されていたことの証左である。別系の伝承故に、同一の題詞下に置かれるのがふさわしい歌が、別々の題詞をとることになったのである。

同じ天武吉野入山の経緯を記すにも、書紀の天智十年の条と天武即位前の条とでは多少の違いがある。壬申乱の記述も、釈日本記所引の日本書紀私記によれば、安斗宿禰智徳日記・調連淡海日記・和邇部臣君手手記などによるものであるようだ。大織冠伝にも、紀には見えない挿話が記されている。天武の事蹟に関して、すでにいくつもの別箇の伝承が存在していたことは明白である。天武天皇物語とも称すべきものが、形成されていたといっても言い過ぎではないであろう。

一連または類似の話に結合し、かつ同一の作者とされる二つの歌が、別箇の伝承に付帯していたという事実は、記紀歌謡の付会から推しても、作者とされる人物が実作者ではないこと、すなわち歌が仮託であることの何よりの証明である。集中の他の天武歌（一21・27・二103）にも、中西氏の指摘される如く[注6]、全て仮託歌としての性格が濃厚である。

この天武歌の直前に位置する麻続王の歌「うつそみの命を惜み浪にぬれ伊良虞の島の玉藻刈りをす」（一24）は、時人歌的発想の「打ち麻を麻続王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります」との唱和である。時人歌的発想の歌自体、芸謡的性格のものであるので[注7]、これらの歌も仮託と判断される。天武四年四月の麻続王配流のことは、紀には「三位麻続王有レ罪。流二于因幡一。」とあるのみだが、この万葉歌・常陸風土記にも異伝の存することから、原巻一編纂時にはすでに歌語り化されていたのである。

こうした例をかんがみれば、同時期の天武に、仮託の機会と傾向を認め得ることは容易である。感を呼んだ存在である。天智紀の童謡「み吉野の　吉野の鮎　鮎こそは　島辺も良き　え苦しゑ　水葱の本　芹の本　吾は苦しゑ」が、「吾」を天武としてとられたものであることを考えても、右の判断は妥当と思われる。

七　成立の場

さて、天武が即位後、吉野山中の道をたどりつつ往時の辛苦憂悶を回想するという内容を持つ仮託歌が生まれる時点をどこに求め得るであろうか。また、その背景はいかなるものであろうか。その点が明らかにされれば、この歌が以上のような内容を持つことは、また別の角度から保証されるであろう。

仮託歌が生まれるほど、天武像が希求される時点は、持統朝において他にはあるまい。人麻呂の日並・高市両皇子の殯宮挽歌の冒頭で天武が重く扱われていることにうかがえるように、当代の宮廷人士の天武に対する尊崇とその表出が強く要請されていたことは否定できない。

書紀の持統朝の記録によれば、持統天皇の吉野行幸は実に三十一回という例を見ない異常な回数に及んでいる。その動機はさまざまに取り沙汰されているが、たとえそこに政治的な動機を見出し得たにしろ、その基底はまぎれもなく天武追慕の情である。天

武追慕こそ持統朝におけるあらゆる政策の方向をさえ規定した感情と言えよう。彼女にとっては夫天武とともに苦難の日々を過ごし、そして白鳳の出発点となった吉野は終生忘れ難い地であったろう。吉野は、そこにまつわる追憶故に、支配者としての女帝の精神の拠り所でもあり、その意味では行幸は呪的なたまふりでさえあったろう。

弓削皇子が吉野行幸従駕の際、天武朝のありし昔をしのび、額田王へ歌（二111）を贈ったことからも推測されるように、持統の吉野行幸には、女帝をはじめ供奉の者達の念頭に天武のありし姿が常に去来していた筈である。

持統には、天武追慕の歌（二159～162）がある。そういう彼女の心情に身辺の者達が反応しないわけはない。加えて、持統のまわりには、人麻呂に代表されるように歌語りへの嗜好が著しい。持統の吉野への行幸従駕の人々の中で、壬申の昔を思い女帝の夫君天武を偲びつつ、想像をたくましうすれば、耳我の嶺（場所の詮索は今はおいて）のあたりでの小休止の際、「先帝も御即位の後の吉野行幸の時、ここで昔を偲ばれておうたいになりました。その御歌は」というような口つきで語られ唱されたものではなかろうか。

巻三挽歌冒頭の聖徳太子歌が、奈良朝初期の竹原井行幸を背景にして、書紀に伝える歌謡から改作されたものであることは、伊藤博氏が論じられたところである。[注8] こうした例が集中にみられることでも、この天武歌が、持統の吉野行幸の途次の従駕歌を披露する場を背景に生まれたということが承認されるであろう。歌の生命ともいえるそうした場に密着した改作が、天武が吉野行幸の山道で往時を回想するというこの歌の内容を規定しているのである。

或本歌と比較すれば、二五番歌が格段に秀れていることは論を待たない。二六番歌もただ「或本歌」とだけ記されていることから、或本においても天武歌として記載されていたものであろう。この両歌が、巻十三などから「間なく時じく雨雪は降る」に手がかりを発見して、転用改作されたことはまず動かせない。詳説は省いて結論をいえば、同じ天武歌とされる両歌でも、その民謡的発想をよく多くとどめた或本歌が仮託改作の原形で、二五番は、これをより一層個人詠に仕上げたものと思われる。「けり」の用語・「念」の用字がそのことを示している。記と紀の同一の歌謡（たとえば、記43と紀35など）の異同にも、同様の指向をよみとることができる。古事記的なものから書紀的なものへの移行の時期に、この或本歌から二五番歌への変貌はおそらく重なるものであろう。そうした高度な改作をなし得る文芸意識を持った者は当然限られてこよう。人麻呂というは簡単である。彼には巻十三の歌を下地[注8]にした「石見国別妻上来時歌」などがある。が、そこまではいうまい。さる歌俳優の如き人物というに留めよう。そして、巻十三は、そういう歌人達のテキストのような役目をも持っていたらしい。

巻十三は、天智朝から奈良朝へかけて宮廷に伝承された謡いものの集成（宮廷歌謡集）であることは、すでに定説とみてよい。[注10] その謡いものの中に、「小治田の　年魚道（あゆち）の水を　間無くそ　人

は汲むとふ（略）」（3260）の歌があるが、それは、書紀天武十二年正月十八日に瑞祥を喜ぶ詔を発し大赦を行ないさまざまな舞楽を宮庭に奏した際の記事、「是日。奏三小墾田儛、及高麗、百済、新羅三国楽於庭中。」の「小墾田儛」と関係があるように思われる。大和など十三国の歌舞をよくする者どもを召したのは天武四年二月九日であった。おそらくその中に「小墾田儛」なる農耕儀礼に由来したらしい舞いをよくする者どももあったのであろう。その舞いの歌謡が、巻十三3260の長歌、またはそれに類似のものではなかったか。

何故に多くの舞いの中から、「小墾田儛」が選ばれて、祝賀の宴に奏されたのであろうか。さだかではないが、天武の個人的嗜好があったやもしれぬ。もしそうだとすれば、天武追慕に満ちた持統の宮廷で、この歌や同じ調子の類歌（一三3293）を下地として天武の二五番歌が生まれるであろうことは容易に想像できる。そこまで牽強付会せずとも、これらの類歌が宮廷歌謡集の中に存在し、天武朝に歌われたらしいことが思われればじゅうぶんである。

原巻一が持統の上皇時代に彼女の意を体して成ったとすれば、[注11] それは右の推測と、ひいては二五番歌が持統朝の雰囲気の中で吉野行幸の場に引きつけられて成ったものとする考察の結果に、さらに蓋然性を加えることになろう。

前章までの考察の結果である、天武が即位後の吉野行幸の際に往時の辛苦憂悶を偲びつつ山道を行くという仮託歌の内容は、以上の如く持統朝の背景の中に成立可能であることが確認できた。

八　むすびに

万葉二五番天武歌の構造と背景を既述のように考えることは、この歌の内包する問題点のいずれとも矛盾することなく、全ての基本的条件に無理なく合致する。そのことは逆に二五番の構造と背景の実体がそのようなものであることも保証している。

二五番歌のこの実体を一つの立脚点とし、かてて加えて前章で述べたように原万葉の最初の撰集の時点を考慮すれば、初期万葉の歌（天武朝以前の万葉歌）は、持統治政下にその歌としての意味を定着させたものと考えられる。すなわち、初期万葉歌の様相は、持統朝において政治の表面にかかわるようになり、その力を示すようになった後宮と、そこに君臨した女帝の意識のプリズムを通して把握されねばならないだろう。おそらくこの視点は、天武朝以前の歌に対するわれわれの概念に一つの転換を与えるのではないか。たとえば、次のようなことも、その一端であろう。妄想に似るが終わりに付け加えたい。

持統朝が天武朝の文運隆盛の諸契機の発現であることは人麻呂の吉野讃歌（一36）に検して説かれていることであり、[注13] その文芸的嗜好の高まりは多くの恋の歌語りをも生み出している。人麻呂もそこに代表選手として後宮の与望を担って登場し、巻十三に伝えられるような宮廷歌謡を下地として、古い皮袋に新しい酒を盛るように、謡いものの新作に精進したわけである。[注14]

作者名をもともと必要としていない古い謡いものが、特定の作者に結合し場面に密着した新しい個人詠として改作される傾向

は、小論の二五番歌の成立と軌を一にしたものである。また、書紀の歌謡のいくつかにその根跡を見出し得る。こうした状況から、持統朝において、伝承された古い儀礼歌・饗宴歌などの、歌に対する見方の根本的変革を伴った新たな文芸意識（現象としては属目吟詠性独詠的一元性等）その他に依拠したところの整備改作、個人詠としての新たな位置づけと意味づけ、つまり宮廷歌謡の再生ともいうべき事業が企図され、実施されたであろうことが思われてならない。その結果が巻一の巻頭歌・舒明歌などの姿ではないのか。

注

1 松田好夫「万葉研究新見と実証」所収
戸谷高明「古代文学の研究」所収

2 拙稿「万葉聖徳太子歌の発想をめぐって」国文学研究三十九号

3 久米常民「万葉集の誦詠歌」

4 中西進「原万葉―巻一の追補―」美夫君志七号

5 小路一光「万葉集における『き』『けり』の意義・用法」早稲田大学高等学院研究年誌十三号

6 中西進「万葉集の比較文学的研究」

7 拙稿「古代抒情詩形成の一過程」国文学研究三十一集

8 伊藤博「題詞の権威」万葉五十号

9 渡瀬昌忠「柿本人麻呂の詩の形成―相聞長歌を中心に―」日本文学七巻八号

10 伊藤博「宮廷歌謡の一型式」国語国文三十五年三月号

11 伊藤博「女帝と歌集―持統万葉から元明万葉へ―」専修国文創刊号

12 橋本達雄「人麻呂と持統朝(一)(二)」文芸と批評三十九年三・九月号

13 橋本達雄「吉野讃歌の背景」古典と近代文学六号

14 拙稿「相聞の享受―恋物語と恋歌と―」国文学解釈と鑑賞四十六年十月号

新刊紹介

松浦友久著『中国詩選三―唐詩―』

現代教養文庫「中国詩選」シリーズの一冊。中国古典の受容の歴史は長いが、その中で唐詩ほどあらゆる人々に親しまれた古典はないであろう。近年でも唐詩についての刊行物は格別に多い。著者は、この書に唐詩中より九十五首を選んで、いちいちの作品について詳しい訳注と評釈を加えているが、その訳（訳詩）のことばは美しい。かつ、評釈は従来の域を脱した点が多く、的確である。それは多分に、著者の詩に対する新しい認識、即ち、「詩人における心象と様式の関連」についての注意による。内容は、解説＜唐詩を読むために、詩人とその時代、抒情の形式＞と、絶句、律詩、古体詩の訳と評釈の五篇。巻末に作者小伝関係年表、地図を加えている。唐詩の美しさを知るために、是非読んでほしい好著である。

（社会思想社、昭和四十七年三月刊、三百七十一頁。三百二十円）